

2020.9.6 第一主日愛老礼拝

イザヤ 43:1-7 「あなたとともにいる」

### 聖書

- 1 だが今、主はこう言われる。ヤコブよ、あなたを創造した方、イスラエルよ、あなたを形造った方が。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったからだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたは、わたしのもの。
- 2 あなたが水の中を過ぎるときも、わたしは、あなたとともにいる。川を渡る時も、あなたは押し流されず、火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。
- 3 わたしはあなたの神、主、イスラエルの聖なる者、あなたの救い主であるからだ。わたしはエジプトをあなたの身代金とし、クシュとセバをあなたの代わりとする。
- 4 わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。だから、わたしは人をあなたの代わりにし、国民をあなたのいのちの代わりにする。
- 5 恐れるな。わたしがあなたとともにいるからだ。わたしは東からあなたの子孫を来させ、西からあなたを集める。
- 6 北に向かっては『引き渡せ』と言ひ、南に向かっては『引き止めるな』と言う。わたしの息子たちを遠くから来させ、娘たちを地の果てから来させよ。
- 7 わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造した。これを形造り、また、これを造った。

### はじめに

今年は9月21日が敬老の日ですが、ひと足早くご高齢の皆さんへの祝福を込めて礼拝をおさげします。愛老礼拝には、老いることを愛するという意味とキリストの愛でご高齢の皆さまを愛するという二重の意味が込められています。一般的な敬老の意味も聖書には記されていて、「あなたは白髪の老人

の前では起立し、老人を敬い、またあなたの神を恐れなければならない。わたしは主である。」(レビ 19:32)とありますように、愛することの中に敬うことも含めてご高齢の皆さまの健康と日々の生活が守られますようにお祈りいたします。

## 1. 死ぬという仕事

1999年10月12日に77歳で地上の生涯を閉じられたクリスチャン作家の三浦綾子さんをご存知でしょうか。「氷点」という作品でその名が知られるようになりました。「氷点」は1963年朝日新聞の懸賞小説で入選した作品で、1,000万円は当時としては破格の賞金でした。三浦さんは肺結核、脊椎カリエス、带状疱疹、直腸がん、パーキンソン病などたくさんの病と向き合って来られた方です。多くの病を抱えるとどうして自分だけこんなに辛い目に遭わなければならないのかと思ってしまうのですが、三浦さんは「こんな病氣ばかりしているわたしは、もしかしたら神様にえこひいきされているのではないか」と語るほど、病を積極的に受け止めて来られました。晩年、パーキンソン病と向き合う三浦さんは「わたしにはまだ死ぬという仕事がある」と語ったそうです。40年間三浦綾子さんを支えて来られた夫であり作家の三浦光世さんは「死ぬという大切な仕事」という本を出版し、クリスチャン夫婦として生きた証を残しておられます。光世さんも2014年10月30日に天に召されましたが、三浦綾子さん、光世さんともに文学を通して世にキリストの愛を証して来られた器として尊敬しています。

「わたしにはまだ死ぬという仕事がある」とは重いことばではないでしょうか。死は誰も避けることができない事実です。避けられないから一般的には、負わされたものと思いがちですが、三浦さんはこれを負うべき仕事として理解したのです。昨今「終活」ということばを良く耳にします。そこで扱われるのは、自分の葬儀はどうするのか、お墓はどうするのか、財産の整理はどうするのかというものが主で、遺された者が困らないようにという意味があります。それも大切なことですが、もっと大事なことは、自分の人生を

どのように締め括るのかということで、これは人生最大の大事な事なのではないでしょうか。これを人任せにしたり疎かにしてはいけないのだと思います。

## 2. 不安と恐れの中で

さて、人生最大の大事な事として死を捉えるとき、その仕事は辛いものなのでしょうか。それとも大変だけれども感謝して受け止めるべきものなのでしょうか。多くの場合、死は不安や恐れと向き合う辛いものと理解されていますでしょう。健康な時は「死ぬことなんて怖くはない」と言えますが、本当に死を間近に迎えたらどうでしょうか。そのときに、死は怖くはないと心から言えるならその人は幸せです。願わくは、すべての人がそう言える確かな根拠を聖書から見つけ出していただきたいと願います。

死の恐怖といいますと少し大袈裟に聞こえるかもしれませんが、実は私たちは日常的に寂しさや恐れを抱えています。それは年齢が進めば進むほど大きくなっていきます。今までできていたことができなくなり、関わる人間関係がだんだん狭くなり、周りにいた友だちもいなくなっていく中で、孤独を覚えるようになります。その孤独が最高に達する瞬間が死だとしたら、死は恐怖以外の何ものでもありません。それに耐えることが人生最後の大事な事だとしたら、人生っていったい何なのかと考え込んでしまうでしょう。

今日の聖書箇所には、私たちが日常的に抱える不安や恐れ、または死の恐れを克服する道が「恐れるな」(1節、5節)という表現で2回記されています。それぞれに理由がありますので、その理由を見てみましょう。

## 3. 恐れるなと語る神

最初の「恐れるな」は1節にあります。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったからだ。」ここで言われている恐れなくてよい理由は贖いにあります。贖いとは身代金を支払って買い取るという意味で、これが転じて罪や奴隷からの解放を意味することばとして使われています。それを成し遂げてくださった

のがキリストの十字架でした。キリストは私たちの罪を代わりに背負って罪の刑罰を受けてくださったので、私たちは罪の咎めから解放されたのです。人間とは実に罪深いものです。その罪が人生最後の瞬間に私たちを責め立てるとしたら、どんなに辛いことでしょう。しかし、キリストは私たちの罪をすべてご自分で負われ、罪の束縛から解放し赦しを与えてくださいました。キリストを信じるなら、もはや責められるものはないのです。それゆえに「わたしはあなたの神、主、イスラエルの聖なる者、あなたの救い主であるからだ。」(3節)と言ってくださいるのです。

二つ目の「恐れるな」は5節にあります。「恐れるな。わたしがあなたとともにいるからだ。」ここでの恐れなくてよい理由は、あなたとともにいる方がおられるということで、それが神さまなのです。勿論、人もともにいてくれる大切な存在であることに間違いはありませんが、いつでも、どこでもとなると限界があります。その点神さまは目に見えませんが、いつでも、どこでもあなたとともにいてくださいます。なぜなら、神さまは「あなたを創造した方、…あなたを形造った方」(1節)だからです。私たちは偶然この世に生まれて来たではありません。神さまによって造られた創造の作品としてのちを与えられ、地上で神さまとともに歩むことで幸せを得るように造られたのです。「あなたが水の中を過ぎるときも、…川を渡るときも、…火の中に歩いても」(2節)とありますように、神さまはどんなときでも私たちとともにおられるのです。

神さまは私たちに2回も「恐れるな」と力強く語ってくださいるお方です。恐れの原因である罪を取り除き、どんなときでもともにいて支えてくださるのです。この神さまを個人的に受け入れることができるなら、老いの中にも平安を得ることができるでしょう。

#### 4. あなたを愛する神

私たちとともにいてくださる神さまは、私たちを愛しておられる神さまで

もあります。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」(4節)とあり、聖書の中で直接的にあなたを愛しているという箇所はイザヤ43:4にしかありません。その愛はご自分が創造された者に向かう特別な眼差しであり、「わたしはあなたの名を呼んだ。あなたは、わたしのもの」(1節)と、私たちの名を呼ぶことでご自分の愛を示してくださったのです。

神さまの愛は気紛れの愛ではありません。どんなときでも私たちを愛しておられる不変の愛です。先に人は皆罪深い者だと言いました。聖書が言う罪は人が神さまを無視して生きることであり、その結果人間関係に亀裂や痛みが生じ、様々な災いや悪事が生じるのです。神さまに背を向けた結果が罪であり、不安と恐れの原因なのです。そのような人に向かって、神さまは「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」と言い続けてくださっていることに驚きを覚えます。私たち人間の愛は気紛れです。でも神さまの愛は、ご自分を見捨て、忘れ去ってしまうような者にも向けられている不変の愛です。この神さまの愛に支えられて、人生を歩んで行きたいと願います。ご高齢のゆえに戦いが増すかもしれませんが、それでもあなたを愛し守ってくださる神さまがおられることを忘れないでください。

## まとめ

「恐れるな」と語ってくださる神さまは、あなたの救い主であり、あなたを愛しておられます。「わたしは、あなたとともにいる」という約束を握って、人生の旅を最後まで歩んで行きましょう。「ともにいる」ことの幸いが、人間関係の中でも味わえたら感謝です。教会は神さまの愛が満ちている場所ですから、神さまの愛を人間関係の中で見える形に変えて、ともに支え合って行きましょう。またその愛を世の中にも発信していけるように願います。ご高齢の皆さまのご生涯が神さまの愛によって守られますように心よりお祈りいたします。